


今 月 の 一 冊

元木更津市教育委員会教育長 西村 堯 選



私の心に残る小説
My Favorite Novels No1

小説を取り上げることの前口上

これまで本欄では長いこと小説を取り上げ紹介することは避けてきた。あまりウィングを広げ過ぎると収拾がつかないのではないか、という危惧からである。

しかし、このところずうっと考えてきたのだが、優れた小説を読み味わうのも大事なのではないか、ということである。評論の類いは、どちらかと言えば問題に対して「論」から迫る。小説は「情」に迫る仕事のように思う。

よく教師の仕事は「魂の技師」と言われるように、人間の感情、情緒に働きかける部分も大きい。とすれば、小説を読み味わうことによって、人間というものの有り様について、幅広く、そして深く理解することができるのではないか。人間の強さ、弱さ、善、そして邪なもの、崇高な姿、などに触れることは、教師の仕事に厚みを加えることになるのではないか。

以前、ある小学校の校内研修で、「教育愛」について話すよう依頼を受けたことがあった。私ははたと困った。「教育愛」について理論的に話す力もないし、仮に「論」で語って、何程の響きがあろうか。そこで私は、「人間の壁」(石

川達三)、「聖職の碑」(新田次郎)の二つの文学作品を紹介しながら、責めを塞いだのであった。

このようなことも思い出しながら、これから時々、小説も取り上げてみようと考えた次第である。

加えて、本欄も、そして筆者である私も、多少マンネリから脱却できるかも知れないと思う。良く言えば彩りを添えることができるかも知れない。

題して、「私の心に残る小説 My Favorite Novels」。



神無き月 十番目の夜

飯嶋 和一 著 ・ 小学館文庫

ISBN 978-4-09-403314-9

638 円 + 税

なぜこの作品を取り上げたかと言えば、題名にある「陰暦 神無月」は新暦の11月だからである。11月にちなんで、私の好きな作家、飯嶋和一の作品を紹介しようという訳である。

さて、(陰暦)神無月・10月の10日は、「十日夜(とおかんや)」の収穫祭・鎌上げの祝いの日である。この日に、常陸国(ひたちのくに)の北限、小生瀬(こなませ)の集落で惨劇が起きた。一村百軒余りの住民、三百名以上が、悉く殺された。まさに、「神が留守にしている」神無き月のできごとである。

物語は、何か野戦場の臭い濃く漂うこの村に調査のために派遣された 大藤嘉衛門 の息を殺すような緊迫した探索から始まる。この物語は、いわば百姓一揆の物語である。

これまで、一定程度の自治が許されていた村落が、関ヶ原の戦い以降、急速に支配力を強める徳川の世の到来で、過酷な検地を受け、それに反発し抵抗したのである。もともとこの地は、陸奥国との境を接し、北からの守りに備え、いざとなれば、ふだんは農民でも、刀、槍を持ち戦いに臨んだ土地柄である。そのため、年貢も軽減され、自治も許されてきた土地である。

小生瀬村の肝煎役(村長)である 石橋藤九郎 の苦心の折衝も空しく惨劇に至る。著者の重厚で、しかも乾いた文体は、登場人物の心と行動を活写する。

飯嶋作品は、「黄金旅風」、「星夜航行」、「出星前夜」、「狗賓童子の島」などを読んできたが、概して希望のある結末である。しかし、この「神無き月 十番目の夜」は、悲劇的な結末を迎える。

旧暦「神無月」の晩秋の長夜に、常陸国の寒村で起きた時代の波に翻弄され、苦渋に満ちた人間のドラマを読み味わっていただきたい。